View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by GLIM IR Institution Repository

女性の越境と「文芸共和国」
—『放浪者』と『パトロニッジ』におけるナショナル・アイデンティティの構築と「公共圏」の可能性—

吉　野　由　利

論文要旨

本稿は、ロマン派期女性作家が「公共圏」の一大形態である「文芸共和国」にどのような可能性を見出したのか、フランシス・バーニー『放浪者』(1814) とマライア・エッジワースの『パトロニッジ』(1814) の比較により検証する。ハーバーマスの「公共圏」のモデルは、ジェンダーを看過するとして、批判的な論考を招いてきた。しかし、1790 年代イングランドの公共圏の「理性的」言語は、時に「放浪する女」であったメアリ・ウルフストンクラフトらに、女性の役割を生殖に限定する「情動的な」ナショナリズム言説に対抗することを可能にした、と積極的に捉えたアンジェラ・キーンなどの批評家もいる。本論文は、キーンやハリエット・ゲストらの先行研究を発展させ、「曖昧な」ナショナル・アイデンティティに悩んだバーニーとエッジワースを対象として先行研究を補う。『放浪者』と『パトロニッジ』がどのようなパトリオットを理想として表象し、「公共圏」でいかに各著者のナショナル・アイデンティティを再構築しているか探求する。

キーワード【フランシス・バーニー、マライア・エッジワース、公共圏、ナショナル・アイデンティティ、パトリオティズム】

はじめに—「公共圏」、「ロマン主義ナショナリズム」、「アイデンティティ」

ユルゲン・ハーバーマス（Jürgen Habermas）の『公共性の構造転換』の英訳 *The Structural Transformation of the Public Sphere: An Inquiry into a Category of Bourgeois Society*（1989）が出版され 30 周年を迎えた。国際的な研究動向を概観すると、英訳の過程で捻出された「公共圏」（the public sphere）という概念はまだまだ有効なものとして捉えられているようである。英語圏文学・文化研究における顕著な例としては、従来 18 世紀の作品や現象を論じるのに用いられてきた「公共圏」の概念が、シェイクスピアやミルトンの研究、あるいは 18 世紀から 19 世紀にかけて大西洋を横断した書物流通と奴隷制を密接に結び付ける研究などがあげられる [1)]。社会科学の領域においても、各国の現代社会問題を分析する際の有効な概念として盛んに応用されているようである [2)]。その背景に、ポピュリズム、SNS への国際的な危機意識

が考えられるだろうが、英国の事例研究の場合、EU 離脱問題を取り巻く世論形成のあり方への問題意識もあるようである[3)]。本論では、これらの研究動向を踏まえ、19 世紀初頭前後に英国の文壇で活躍したフランシス・バーニー（Frances Burney, 1752–1840）とマライア・エッジワース（Maria Edgeworth, 1768–1849）が、「公共圏」の一大形態である「文芸共和国」（the Republic of Letters）にどのような可能性を見出したのか、検証することを目的とする。

1790 年代イングランドの女性作家と「公共圏」を論じたアンジェラ・キーンによれば、時として家庭の領域（the domestic sphere）の外へ「放浪する女性たち」（wandering women）であったメアリ・ウルストンクラフト（Mary Wollstonecraft, 1759–97）、ハンナ・モア（Hannah More, 1745–1833）、アン・ラドクリフ（Ann Radcliffe, 1764–1823）らは、ロマン主義ナショナリズムのジェンダー編成が、ネイションの「有機的な」絆を強調することから女性の主な役割を生殖に限定すると、問題視した[4)]。「情動的な」ロマン主義ナショナリズム言説に閉塞感を感じた彼女達が活路を見出したのは「文芸的公共圏」（the literary public sphere）、つまり「文芸共和国」の言説空間であったという。理性的な討議を尊重し、ジェンダーを「生物学的条件でなく、パフォーマティヴによって」規定することが可能な「公共圏」の理性的な言説が、ウルストンクラフトら女性作家に「自己の市民参加を想像する」ことを可能にしているというのだ[5)]。キーンも認めるように、ハーバーマスの視座はジェンダーを看過していると、ジョーン・ランディスやナンシー・フレイザーをはじめとする多くの論客に批判されてきた[6)]。その潮流の中、ロマン主義ナショナリズム言説との比較から、肯定的な再評価を与えたキーンの視座は興味深い。1750 年から 1810 年にかけての「公共圏」を検証したハリエット・ゲストも、キーンより慎重なアプローチではあるが、ハーバーマスのモデルに有用性を見出している。ゲストは、女性作家が「パトリオティズム」（patriotism）の概念化に従前みなされてきたよりも重大な貢献を果たすことを可能にしたのは「公共圏」であると論じつつ、女性が参加する権利を与えられていない「政治的現実」との埋めがたい溝に注意を喚起している[7)]。

本稿では、キーンやゲストの論考の対象から外れているものの、作品の正典化の進むバーニーとエッジワースの「公共圏」との関わりを概観し先行研究を補うことを試みる。多元的文化ルーツを持つ両作家こそ、ロマン主義ナショナリズム言説を一層排他的なものとして捉えていたのではないかと思われるからである。実際、EU 離脱問題に伴い、スコットランドの独立問題や、南北アイルランドの分裂問題が再燃している現在の政情から翻ると、バーニーやエッジワースのナショナルアイデンティティの不安定さが改めて理解できるだろう。両作家の作品は、ウルストンクラフトらの著作のように「公共圏」に希望を見出しているのか、いかなる「パフォーマティヴ」によって著者自らのジェンダーとナショナル・アイデンティティを再定義しているのだろうか、以下で検証する。

1707 年以降 2 度の「合同」を経て 1801 年に成立した合同体制とその帝国主義政策の展開

に伴い、英国を構成する各ネイションのアイデンティティ模索は様々な形でなされた。その文学的な模索の顕著な例として考えられるのは、ネイションや文化圏の境界を横断した生涯と作家活動で知られるバーニーとエッジワースの作品であろう。両作家の作品は、文化的に柔軟な「ネイション」の編成を描くことで、例えば「アングロ・アイリッシュ系」（Anglo-Irish）などといった文化的に多義であるため「曖昧」とされる個人のナショナル・アイデンティティの再定義を試みているからである。そして、この試みの大きな展開を可能にしているのが、「文芸共和国」と呼ばれる言説空間なのである。特に、「文芸共和国」の理性的なコミュニケーションは、それぞれ革命や農民蜂起の恐怖に肉薄した経験のあるバーニーやエッジワースにとって、魅力的であったに違いない[8)]。しかし、クレイグ・キャルホーンが鋭く指摘するように、ハーバーマスの構想した「公共圏」は構成員が「アイデンティティ形成」を行う「創造的な」場ではないと考えられる[9)]。ハーバーマスのモデルでは、個人のアイデンティティ問題は、「公共圏」に参加する以前に「私的領域」（the private sphere）で解決されていることが前提となっているからである。あるいは、「公共圏」での対等な意見交換を想定するのに不都合な対話者間の社会身分（ジェンダー、階級、エスニシティなどによる）の不平等は、考慮の対象外とされるからである[10)]。

以下では、19世紀初頭の英国の「文芸共和国」が、ハーバーマスのモデルと異なり、個人のアイデンティティ形成と「公共善」（the public good）の言説が絡み合う舞台としてバーニーやエッジワースの作品に表象されている様を概観する。ロマン主義ナショナリズムの言説へ安易に便乗することを拒絶するバーニーとエッジワースの小説は、「パトリオティズム」の理念の独自な展開を図ることで、「ネイション」にそれぞれの著者の居場所を確保しようと試みる[11)]。二人の女性作家の小説が「公共圏」で紡ぐ、「パトリオティズム」の規範は、公共善という大義のみならず、作家自身のアイデンティティ再構築と連動していると考えられる。従って、本稿では、バーニーとエッジワースの著作活動は、「文芸共和国」という「公共圏」を、「公」（the public）と「私」（the private）の領域を横断する問題を解決する領域として、ハーバーマスのモデルよりも複雑に捉えていると論じる。議論の主な対象は、ヒロインが様々な越境を体現するバーニーの『放浪者』（*The Wanderer*, 1814）とし、同年に出版されたエッジワースの『パトロニッジ』（*Patronage*, 1814）と簡単な比較を行う。

バーニーとエッジワースの伝記背景にみる「越境」

バーニーとエッジワースの作品は、それぞれ、女性の領分を制限する上、ネイションの絆に共通の伝統・文化・言語・民族性を強制するというロマン主義ナショナリズムの排他性に対し、批判的に応答している。豊富な「越境」体験をもっている女性作家たちならではの洞察に基づいた表象が展開されているといえるだろう。たとえば、バーニーは、フランスから

革命を逃れて英国に亡命してきた改革派将校アレクサンドル＝ジャン＝バプティストゥ・ダーブレー（Alexandre-Jean-Baptiste Piochard D'Arblay, 1754–1818）と結婚した後、ダーブレー夫人（Madame D'Arblay）として英仏間を行き来する人生をおくった。中でも、1802 年のアミアンの和約が締結されたのを機に渡仏した際は、政変のため、家族でパリ周辺に留まることを余儀なくされた期間が 10 年間にも及んだ [12)]。

バーニーの伝記体験が書き込まれているといわれる『放浪者』の原稿も、自身が献辞で述べるように、ドーバー海峡両岸の検閲を潜り抜け刊行に漕ぎ着いた [13)]。地理的文化的な越境を経て公刊されたこの長編小説は父親チャールズに捧げられており、献辞では、越境者のジレンマもまた吐露されている。

> Anxious ... to steer clear, alike, of all animadversions that, to my adoptive country, may seem ungrateful, or, to the country of my birth unnatural...[14)].

「自分が選んだ国」（my adoptive country）のフランスには「恩知らず」（ungrateful）と思われたくないし、「自分の生れた国」（the country of my birth）の英国ないしイングランドには「情がない」（unnatural）と思われたくないというこの一節は、バーニーのナショナル・アイデンティティが両義的であることを端的に示している。また、このような私的な事情を、巻頭早々「読者」（public）に打ち明けている点も注目すべきであろう。

バーニーの「越境」は何も結婚して始まったことではなかった。父親チャールズは、マックバーニー（Macburney）という元来の姓からスコットランドのルーツを示す 'Mac' を抹消し、家系の脱スコットランド化を図った [15)]。また、母方の祖母はフランスのカトリック教徒であったとされる [16)]。つまり、バーニーは結婚以前から多元的な文化ルーツ、信仰を背景とする出自を持っていたのである。ロマン主義ナショナリズムの規範に照らせば、バーニーの英国人およびイングランド人としての正統性が揺ぐのは想像に難くない [17)]。

バーニーと年齢差はあるものの共に同時代の女性作家に多大な影響を与えたエッジワースもまた、文化的に複雑な出自を持っている。祖先が 17 世紀にイングランドからアイルランドに植民した地主の家系出身である。エッジワース一家のように、イングランドでもアイルランドでも異邦人扱いをされるアングロ・アイリッシュ系地主層にとって、ロマン主義ナショナリズムの文化的偏狭性は自分達の存亡に関わる脅威だった。実際、20 世紀に達成されるアイルランド共和国の独立は、ゲール文化の復興を大きな原動力としたものだった。この意味で、エッジワースはロマン主義ナショナリズムの文化的排他性に対し、バーニーよりも大きな危機感を抱いていたともいえるだろう。

このように文化的に多元な出自を持つバーニーとエッジワースの小説は、ロマン主義ナショナリズムの言説を安易に受容する代わりに、各々、パトリオティズムの理想を提示する。

「パトリオティズム」の概念は、当時純粋な「愛国心」や、「国の安泰のための献身」を指すに留まらず、体制批判の大義名分として便宜的に用いられるなど、多様な形態を取って現れた。偽善的な人物への皮肉に用いられる例も、*OED* およびサミュエル・ジョンソンの辞書で留意されている[18]。また、この概念は「コンテクストこそ違えば異なる意味を持った」[19]。それだけ多義的であるからこそ、バーニーやエッジワースをはじめとする女性作家が多様な言説を紡ぐ可能性を見出した概念であったと考えられる。

バーニーやエッジワースが展開したパトリオティズムの理念は、非国教徒のリチャード・プライス（Richard Price, 1723–91）が説いたように、自国を愛することと他国を敬愛することの間に矛盾を認めない啓蒙主義コスモポリタン思想につながるものである[20]。プライスが説いたパトリオティズムのあり方は、1790 年代の仏革命論争で、ロマン主義ナショナリズムを展開したエドマンド・バーク（Edmund Burke, 1729–97）の『フランス革命についての省察』（*Reflections on the Revolution in France*, 1790）で痛烈に批判され、急進派・非国民思想の烙印を押されることとなった。バーニーとエッジワースがそのように危険視された理念を転用するリスクを負ったのは、実に興味深いことである[21]。二人が執筆した当時、ナショナリズム言説への加担を回避する必要がそれほどあった、とみなせるのではないだろうか[22]。

女性小説家と「文芸共和国」

さて、バーニーとエッジワースは小説家として、「文芸共和国」をどのような言説空間として表象しているのだろうか。バーニーの小説第一作『エヴェリーナ』（*Evelina: Or the History of a Young Lady's Entrance into the World*, 1778）は、「公共圏」が女性に危険な魅力を持つ世界であることを的確に捉えている作品として、ジョン・ブルーアーに高く評価されている[23]。巻頭では、匿名の「編集者」を名乗るバーニーが、『マンスリー・レヴュー』と『クリティカル・レヴュー』の執筆者達に宛てた献辞で、「庇護」（protection）をもとめる一方、牽制をかけている。まず、「怠惰な数時間の産物で、とるにたらない作品」（the trifling production of a few idle hours）を上梓するのも、ひとえに文芸批評の対象が幅広くなってきたためであり、この作品の評価を拒むのは昨今の批評活動の潮流に逆行する、と警鐘を鳴らすことから始める[24]。続いて、批評家たちを「出版業界の判事かつ読者の検閲者」（Magistrates of the press, and Censors for the Public）と呼び、「不公平や先入観で偏った」評価を下さないよう要請する。当時の献辞や序文でお決まりだった自己卑下のレトリックを踏襲しつつ、大胆にも批評家たちの役割を再定義しているのである。

続く読者への序文の冒頭でも、「文学的共和国」が批評家たちに公平に取り締まられていることを期待できる反面、ジャンルによって作家の身分が上下する不平等な世界でもあることを指摘し、ハーバーマスが後に看過することになる「公共圏」の不穏な現実を詳らかにす

る[25]。

> In the republic of letters, there is no member of such inferior rank, or who is so much disdained by his brethren of the quill, as the humble Novelist...[26].

続く一節では、このような言説空間に「編者」（the editor）として参入し「読者」に作品を提示するに当たり、自らの「特別な事情」のため「不安」（timidity）と「自信」（confidence）が「極めて奇妙に交錯」しているという心情を吐露し、「匿名」（impenetrable obscurity）を保つことへの強い希望を示す。

> The following letters are presented to the public—for such, by novel writers, novel readers will be called,—with a very singular mixture of timidity and confidence, resulting from the peculiar situation of the editor; who, though trembling for their success from a consciousness of their imperfections, yet fears not being involved in their disgrace, while happily wrapped up in a mantle of impenetrable obscurity[27].

ここで述べられている不安の要素のひとつは、「文芸共和国」がジョンソン、ルソー、リチャードソン、フィールディング、スモーレットら男性の「偉大な作家たち」（the great writers）に主導されてきた世界だという認識であることが、次の引用の前半に明記されている。続く一節でこの不安も、「偉大な作家たち」、つまり正典的作品を上梓した男性作家達とは異なる土俵で独自の路線を模索しようという決意に切り替えられている。すなわち、上の引用後半にあるように、主要な男性作家たちは「文芸共和国」を開拓したものの、雑草を刈り取る際に「花々」（the flowers）まで刈り取ってしまい、道を平坦にしたものの、土壌を「不毛」（barren）にしてしまったと、問題提起するのである。

> However zealous, therefore, my veneration of the great writers I have mentioned, however I may feel myself enlightened by the knowledge of Johnson, charmed with the eloquence of Rousseau, softened by the pathetic powers of Richardson, and exhilarated by the wit of Fielding, and humour of Smollet; I yet presume not to attempt pursuing the same ground which they have tracked; whence, though they may have cleared the weeds, they have also culled the flowers, and though they have rendered the path plain, they have left it barren[28].

つまり、男性作家たちが文学を制度化する中で荒廃させてしまった言説の土俵を、独自の方法で豊穣にすることこそ自らの使命ではないか、と決意表明するのである。「文学的公共圏」

で蔑まれる小説家として、しかも「偉大な」男性作家の後を追う女性作家としての貢献の余地を戦略的に自問、自覚する重要な一節である[29)]。

このような公共圏に対するバーニーの不安と期待は、『エヴェリーナ』刊行のほぼ20年後に出版されたエッジワースの『教養のある淑女たちへの書簡集』(*Letters for Literary Ladies*, 1795)に受け継がれている。より多くの女性作家の活躍するようになった時代背景にもかかわらず、『教養のある淑女たちへの書簡集』は、「文芸共和国」で女性に期待されるのは、「著者」ではなく「読者」の役割であると示唆するからである。第一部で理性の鍛錬と文学的素養が女性に必要か否か議論する「紳士」と「友人」の往復書簡は、まさにそのようなジェンダー役割を前提とする。つまり、女性を「著者」でなく「読者」に育成することの是非に議論が終始しているのだ。女性の文芸修養を支持する「友人」の定義によれば、「教養のある淑女たち」(literary ladies)は、人にひけらかすためでなく、「有用で愛想のよい」(useful and agreeable)人物になるために知力を高めた女性を指す。

> When I use the term literary ladies, I mean women who have cultivated their understandings not for the purposes of parade, but with the desire to make themselves useful and agreeable. I estimate the value of a woman's abilities and acquirements, by the degree in which they contribute to her happiness[30)] .

'useful', 'agreeable' といった形容詞が対人関係を想定した属性を指すことから、この「教養のある淑女たち」の定義は、女性の読書が個人的な耽溺に暴走・終始するのを防ぎ、社会に資するよう方向付けしているととれる。そして、「知性が養われていない女性がそのような(素晴らしい)妻や母になれるだろうか」(Can women of uncultivated understandings make such wives or such mothers?)という「友人」の手紙の結語が示唆するように[31)]、女性の「幸せ」(happiness)は「妻」ないし「母」としての幸せを指すものと想定されている。女性に文芸を奨励する登場人物でさえ「教養のある淑女たち」に望むのは、家庭的領域における「妻」ないし「母」としての役割なのである。結局、男性本位のジェンダー役割であることに他ならない。

興味深いことに、*OED* の 'useful' の A. 1. a の項に、'agreeable' とのコロケーションの用例 'either useful or agreeable' が記載されている。出典はエドワード・ギボン(Edward Gibbon, 1739–94))の『ローマ帝国衰亡史』(*The Decline and Fall of the Roman Empire*, 1776)の奴隷に関する記述からの用例である。

> Hope, the best comfort of our imperfect condition, was not denied to the Roman slave; and if he had any opportunity of rendering himself either useful or agreeable, he might very naturally

expect that the diligence and fidelity of a few years would be rewarded with the inestimable gift of freedom[32].

このコロケーションの残響がエッジワースの頭の中にあったのかは定かではないにせよ、彼女の「教養のある淑女たち」とギボンの「奴隷」の属性が、類似したフレーズで形容されているのは注目すべきである。さらに、エッジワースの「教養のある淑女たち」は「有用」と「愛想」の両方を求められているので、片方を求められているギボンの奴隷よりも高い要求を突き付けられた存在として表象されているともいえるかもしれない。

これらの検証を踏まえると、バーニーとエッジワースが表象する「文芸共和国」は、女性小説家にパフォーマティブの余地を与えると同時に、ジェンダーの緊張関係を無視できる訳ではない世界として捉えられているといえる。そして、その元凶ともいえる家父長制の抑圧は、以下で論じるように、両作家がロマン主義ナショナリズムのパラダイムに対抗し造形するパトリオットの理想像にも影を投げかけている。

『放浪者』のヒロインの「越境」

恐怖政治時代のフランスを舞台にした『放浪者』のヒロインは、あらゆる種類の越境を体現した人物として描かれる。作品は、彼女が英国へ不法運行する船に助けを求める場面から始まる。乗客の反対を押し切るイングランド人紳士ハーリーとパウエル提督のお陰で渡英を果たす彼女には、姓名を明かせない事情がある。肌に染料を塗る、男装する、様々な階級の女性の服を着るなどして変装を重ね、人種、ジェンダー、階級の境界を越え続ける。また、言語圏も越境し英語とフランス語の両方を自在に操ることから、周囲にはフランス人とも英国人とも疑われ、ナショナリティの越境も反復する[33]。果ては、娼婦か家庭を追い出されたふしだらな女性ではないかという憶測も招き、不本意ながら美徳と悪徳の境界線の越境も余儀なくされる。このように、彼女は多領域に亘る越境を実践し、ある種捉えどころのない存在として表象されている[34]。

そのため彼女には実に様々な呼称が与えられている。語り手には、「謎の女性」（Enigma），「身元不詳の女性」（Incognita）などと呼ばれ、登場人物の間では、恩人から秘密の通信用に与えられた L. S. というイニシャルから転じたエリス（Ellis）という名で呼ばれ、意地悪な登場人物達には「フランスかぶれのペテン師」（the frenchfied swindler）などの蔑称で呼ばれる。しかし、彼女は、ジュリエット・グランヴィル（Juliet Granville）という名を持つグランヴィル卿の娘で、パウエル提督の姪に当たることが、プロット展開で明らかにされる。フランスでの恩人の命を恐怖政治の手先から救うため名前を明かせないという深い事情に縛られる設定である。

隠蔽される女性の美徳とアイデンティティ

作中、ジュリエットの本名と出生の秘密が明かされる舞台として、コーヒーハウスが選ばれていることは示唆に富む[35]。死んだ妹がグランヴィル卿の内縁の妻にされていたのではないかと疑うパウエル提督は、グランヴィル卿に面談を要求し、その会場として早朝のコーヒーハウスを指定する。二人が、館内の「個室」(a private room)で、彼女の出生の真相に迫る様子は、以下のように提督によって具に回想される。

> I called him, therefore, to account, and bid him meet me, at five o'clock in the morning, at a coffee-house. We went into a private room. I used no great matter of ceremony in coming to the point. You have betrayed, I cried, the unprotected! You have seduced the forlorn! You have sold yourself to the devil![36]

提督の回想によれば、グランヴィル卿はジュリエットの母親と正式に結婚していたこと、彼女の死後父親のメルバリー伯が勧める政略結婚をしたこと、フランスの良家の知り合いを頼りジュリエットを現地の修道院に預けたことをその場で認めた。そして、グランヴィル卿は、ジュリエットへの財産分与を認める文書をパウエルに託すが、家庭の事情で最初の結婚のことは隠す必要があるからと、パウエルに任務が解かれ永久帰国するまでは黙秘(concealment)することを約束させる。そのくだりは、以下のように提督によって述懐されている。

> [He] begged me, for family-reasons, to agree to the concealment, till I returned home for good; and had a house of my own in which I could receive the child, in the case his second lady and his father should behave unhandsomely[37].

提督は、グランヴィル卿の言うままにジュリエットの正統な出自を秘匿することに合意した理由として、妹が常に「高潔な女性」(a woman of honour)であったことが確認できあまりに嬉しかったためであると釈明する[38]。さらに、ジュリエットが継母たちに厳しい仕打ちを受けて傷つくことを恐れたためでもあり、任務のためジュリエットを自分の家に引き取ることができなかったため、でもあるなどと延々と理由を連ね、歯切れの悪さが否めない弁解を展開重ねる。

提督の釈明は、結局のところ、グランヴィル卿が自分の妹との「法的な婚姻」(lawful marriage)を認める「遺言補足書の写し」(a copy of a codicil)を預けるほど、高潔な

（honourable）人物であったため、と締めくくられる。

> And the more, as his lordship was so honourable as to entrust to me a copy of a codicil to his will; written all in his own hand, and duly signed and sealed; wherein he owns his lawful marriage with my poor sister; and leaves her child the same fortune that he leaves to his daughter by his wife of quality[39].

この引用部で、注目すべきは、ジュリエットのアイデンティティと美徳が、母親の貞淑に規定され、父親の権限で作成された法的効力を持つ文書によって保証される必要があるものとして描かれているという点である。さらに重要であるのは、ジュリエットが匿名であらゆる「越境」を繰り返す羽目になった元凶として、ジュリエットのアイデンティティと美徳の鍵を握る男性保護者たちの秘匿が明るみにされることである。

ここで、ジュリエット母娘のアイデンティティと美徳が隠蔽される舞台に、コーヒーハウスが設定されている意義を考察したい[40]。作中のコーヒーハウスは、出世街道を進むパウエルが、貴族と対等に交渉できる場として選んでいるという意味で、ハーバーマス的な「公共圏」の一面を持って描かれていると言えるだろう。しかし、バーニーが表象するコーヒーハウスは、ハーバーマスの理想とは対照的に、自由闊達な議論を奨励し物事の可視化を推進するはずの「公共圏」の暗部を露呈するのである。なぜなら、『放浪者』のコーヒーハウスは、単に女性に敷居の高い本質的に男性的な空間であるだけではなく[41]、女性の美徳や名誉、アイデンティティが、男性親族の信頼関係や都合、独断で秘匿ないし留保されてしまう隠し部屋のような私的空間（上の引用の一節では ‘private room’）を内包する館として表象されているからだ。『放浪者』におけるコーヒーハウスは、ある意味、ゴシック小説の古城のような迷宮構造を持つ空間として表象されているとさえいえるかもしれない[42]。当時の典型的イメージに対抗し、封建的家父長制を彷彿とさせる古城のイメージと重なるようなコーヒーハウスの表象を考案するところに、バーニーの小説家としての鋭敏な洞察力と独創性を認めることができるのではないか。

『放浪者』におけるパトリオットの理想

『放浪者』の登場人物の中で、ジュリエットの父親のグランヴィル卿は伯爵家の世継ぎであることから、理想的なパトリオットとしての役回りを期待する読者もいるだろう。たしかに、身分違いの女性との結婚に踏み切る過去を持つことから、社会変革をもたらす可能性を少なからず感じさせる登場人物である。しかし、伯爵との直接対決を避け、ジュリエットを伯爵家の一員として確立することなく、小説の冒頭ではすでに死去された存在として退場さ

せられている[43]。貴族の階級的排他性を是正するのに挫折するどころか、そもそも娘を守りきれないことから、理想のパトリオットの器量がない人物として描かれているといえるだろう。

グランヴィル卿の秘匿に加担するパウエル提督も、軍人としてパトリオティズムの言説を意識した言動を特徴とするものの、その浅薄な内容から理想のパトリオットの要件を満たすとは言い難い。たとえば、小説冒頭で、提督は、海軍のメンバーこそ国王を支える真のパトリオットであるという自論を展開しながら、女性、子ども、そして降伏した敵を虐待することは、「真の英国人」（true Briton）にあるまじき行為だ（A woman, a child, and a fallen enemy, are three persons that every true Briton should scorn to misuse.）[44] と、バークのナショナリズム言説に織り込まれた騎士道精神に呼応するレトリックを用いながら、周囲の乗客の反対を押し切って、黒人女性に変装したジュリエットを救う[45]。他方、国際結婚を容認せず、「外国に結婚相手を探しに行くような男性はイングランドに戻ってくる資格がない」（a man who could go out of old England to chuse himself a wife, never deserves to set foot on it again!）と思う、と言い放つなど、偏狭なナショナリストともいえる態度を見せる[46]。そもそも彼がジュリエットと連絡を取ろうとしなかったのも、「あるフランス紳士」（a French monsieur）と結婚したと伝え聞いたからである[47]。また、ジュリエットの恩人のフランス人司教と知り合った際には、キリスト教徒の聖職者には宗派を問わず敬意を持つ、と言葉をかけながら、国民性のステレオタイプを受け売りする。

> Mr. Bishop, I beg you to favour me with your company to eat a bit of roast beef with us at our lodging-house; after our plain old English fashion: which, if I should make free to tell you what passes in my mind, I hold to be far wholesomer than your ragouts and fricandos, made up of oil and grease[48].

このように、文化的に偏狭な態度のゆえ、母国で異邦人扱いされるという実に厳しい「女性の苦難」（小説の副題となっている ‘female difficulties’）を姪に課し、上述したようにグランヴィル卿の臆病な貴族性を正すこともできない人物として描かれることから、努力で立身出世したといえども、国民のリーダーとしては不適切な存在として描かれている。

ジュリエットが小説の結末で結婚するハーリーもまた、多言語能力を駆使しながら文化的・社会的他者への善意を実践するパトリオットの候補の一人として描かれる。小説冒頭、フランスの海岸で、黒人女性に変装して英国行きの船への乗船を懇願する彼女に出会った際、次に引用するようにフランス語で話しかけ、パウエル提督と共に、他の乗客の反対を制して彼女の乗船を実現させる。

> He then, in French, enquired of the new passenger, whether she would not have some thicker covering, to shelter her from the chill of the night; offering her, at the same time, a large wrapping coat[49].

その後も、ジュリエットに対する越境的な善意の行為を実践し続けるハーリーは、ジュリエットを強要された婚姻関係の呪縛から解放する。その後、貴族的な「ハーリー・ホール」にジュリエットを妻として迎え入れることにより、作品に一応のハッピーエンドをもたらすため、理想的なパトリオット候補のひとりとして提示されているといえるだろう。しかし、語り手に「女性版ロビンソン・クルーソー」（a female Robinson Crusoe, as unaided and unprotected, though in the midst of the world, as that imaginary hero in his uninhabited island）[50] と呼ばれ称えられるジュリエットのあらゆる逆境の克服の前に、精彩を欠く存在として造形されていることは否めない[51]。また、ジュリエットが働くことによって身分を落とすのではないかと、懸念するような女性の領分に対する保守的な態度から、ジュリエットの「同志としてはもの足りない」人物として造形されているといえよう[52]。

これらの主な男性登場人物と比べると、ジュリエットは真のパトリオットに最も近い存在として描かれていると思われる。彼女は様々レベルで「越境者」を体現するが、母国イングランドの地域社会を「他者」として放浪することで、出会う人々の善意や共感という美徳のみならず偏狭性や差別意識を浮き彫りにするプリズムのような機能を果たす[53]。その意味で、英国人らしさ、特にイングランド人らしさ、を良くも悪くも明確にする存在として描かれていると解釈できるのではないだろうか。

ジュリエットは、また、恩人のフランス人神父を救う為あらゆる犠牲を払うことで、越境的な信頼関係の模範を示す。しかし、その越境的な忠誠心、そして多言語能力のゆえ、ナショナル・アイデンティティが曖昧な人物としてしばしば不信感を招く。フランス語を自在に操るジュリエットの母語は英語とされるが、「多少の外国人訛り」（something of a foreign accent）があるため、母国でも異邦人扱いをされる羽目に陥る[54]。ジュリエットの人物造形を通し、コスモポリタン思想と矛盾しないパトリオティズムの実践が可能であるとしても、言語の運用によっては「異邦人」として排斥される可能性をテクストは示す。

他方で、ジュリエットの「夫」を名乗るフランス人の男性が多言語能力を悪用して、ジュリエットを苦難に陥れることから、多言語を操る者への警戒があながち的外れでないことも作品で示唆される。恐怖政治の手先として英国までジュリエットを追いかけることに「悪魔のような喜び」（diabolical delight）を感じるこの人物は、英語に堪能なことから彼女の財産分与に関する書類を解読し、彼女の恩人をギロチンの人質にとり彼女に結婚を強要するというプロットになっているからである[55]。

『パトロニッジ』におけるパトリオットの理想

こうしてみると、ジュリエットは、言語文化的な越境能力において他の登場人物よりも格段に優れ、英国の人々の特質や徳を浮き彫りにするプリズムのような存在であることからも、理想のパトリオットに一番近い存在として表象されているといえるだろう。彼女の越境能力は、運命に翻弄されて得られた偶然の産物である。対して、エッジワースの作品が理想とするパトリオットには、多言語・多文化理解力の意識的習得が求められている。標準英語の習得が必須とされるのもまた特徴である。このようなパトリオットの創出制度として、エッジワースは『パトロニッジ』をはじめとするフィクションや教育論で「専門教育」(professional education) のあり方を展開している[56)]。

エッジワースの小説では、「専門職」につく男性登場人物達が、多言語を操り、越境的な善意に基づいてパトリオットとして大活躍する。特にその傾向が明確にされているのが、公職の男性とその家族の世界を描く『パトロニッジ』である。但し、「専門職」といっても、エッジワースの場合、『専門教育論』(*Essays on Professional Education*, 1809) の序文で再定義するように、伝統的な専門職の軍人や法曹、医者、聖職者に加え、「カントリージェントルマン」、「君主」、「政治家」まで含む[57)]。標準英語、地域ないし社会の方言、外国語の習得が肝要な「専門職」で努力する男性は、立身出世し、仲間や他者理解に優れた理想のパトリオットになれるという、教育や社会のモデルをエッジワースは提示する。そのような制度化を構想するエッジワースの著作は、言語・文化圏の越境の重要性をバーニーよりも体系的に示しているともいえるかもしれない。その背景に、アイルランドのリーダーとして、さらには帝国のリーダーとして、アングロ＝アイリッシュ系の地主階級を正当化する必要性を認めることができるだろう。

さて、「専門教育」の門戸が開かれていない女性には、言語や文学に関する教育の機会も制限され、その結果、理想のパトリオットとしての機能も男性より限定されてしまうことが、『パトロニッジ』では示唆されている。17 世紀の「普遍言語計画」に関与したジョン・ウィルキンズ (John Wilkins, 1614–1672) の著作に関心を抱き外国の機密文書の暗号を解読して首相を助けるパーシー氏や、多言語を駆使して専門職業人として成功する息子たちに比べると、パーシー夫人や娘たちの多言語能力や文化的越境性は研ぎすまされた言語感覚を披露するとはいえ、格段に抑えられてものに設定されている[58)]。すべての言葉に「力と意味を」(force and meaning) を与えながら英仏の古典文学を朗読することができる『放浪者』のジュリエットよりも、格段に抑えられた多言語能力や文化的越境能力をもって造形されている[59)]。

語り手のパフォーマティヴ

このように『パトロニッジ』では、家父長的なジェンダー分業に即した言語能力、文化理解が理想の女性パトリオットの特徴として例示される反面、それを揺るがす「三人称の語り手」のパフォーマティヴも展開される。この語り手は読者によって小説家エッジワースと同一人物とみなされがちであることから、女性の語り手として捉えられる傾向にある一方[60]、公職世界の社会方言や外国語を操る多言語パフォーマンスを読者に垣間見せる。例えば、ホートン大佐親子の口論について、「親子の口論はショックを与える場面ですので省きます」（'We spare the reader a shocking scene of filial and parental reproaches'）[61] と読者に断ったり、「お許し頂けると思いますので、ヘンリー氏とコンスタンスのラブシーンを飛ばします…」（'We pass over ... shall we be forgiven — the love-scenes between Mr Henry and Constance.'）[62] と述べる箇所で、「貞淑な淑女」（the proper lady）の横顔を見せる[63]。他方、パーシー家の次男アルフレッドが訴訟の際代理人として述べる陳述を長々と描写することで、「女性的な」領域を逸脱してもみせる[64]。テクストの人物造形やプロット展開においては、言語の使い手としての女性の能力は抑制されているように見える一方で、語り手のパフォーマティヴはそれを逸脱していることになる。したがって、「文芸共和国」は、エッジワースにとって、三人称の語りのモードを活用し従来のジェンダー分業を逸脱するパフォーマティヴ可能な言説空間でもあるといえる[65]。

『放浪者』の「三人称」の語り手に至っては、『パトロニッジ』の語り手よりもさらに鮮明な形で多言語能力を披露している。顕著な例は第 3 巻冒頭第 41 章の、ジュリエットと幼馴染ガブリエラが再会した際に交わされるフランス語会話の描写にみられる。かなりの長さのフランス語の発言を原文のまま本文に挿入し、注で英語の逐語訳を示し、優れた多言語能力と多文化理解を兼ね合わせる印象を読者に与える。この場面では、革命を逃れて避難してきたイングランドの不慣れな地で、恐怖政治下の故国に対する苦渋と懐かしさの入り混じった複雑な感情を吐露するガブリエラが登場する。まず、彼女のフランス語の嘆き、「おお、愛する祖国よ！――不幸で罪な祖国――けれども永遠に愛する祖国よ！――もう二度と帰ることはないでしょう！」が原文で紹介され、それに付けられた注で、"Oh my loved country!—unhappy, guilty—but for ever loved country!—shall I never see thee more!" という英訳が記載されている[66]。つまり、語り手は、フランス語によるパトリオティズムの表現を軽々と提示するのである。

但し、この章で原文表記されるフランス語の発話は、ガブリエラが亡くなった息子と幼馴染のジュリエットへそれぞれ語りかける言葉が主体で、母性愛あるいは女性の友情を表現する言動であることから、女性の領域にあるといえる。たとえば、ガブリエラが息子に語りか

ける「私の天使よ！私の子どもよ！安らかに眠り続けてちょうだい。私から逃げ去った安らぎ、私が失ってしまった幸せ、私を見捨ててしまった貴重な魂の平安、があなたのものになりますように！永遠に！私の子どもよ！」というセリフはその好例である[67]。

著者と語り手の関係の観点から見れば、『放浪者』の語り手も『パトロニッジ』の語り手同様、タイトルページの著者の氏名表記から、読者には女性として捉えられがちであることが想定される。従って、『放浪者』の語りのモードも読者に女性の語りと多言語能力、多文化理解を結びつけるよう働きかける効果をもつ[68]。但し、女性のジェンダー役割を意識してか、語り手の多言語能力が控えめにされている箇所もある。例えば、ジュリエットと恩人のフランス人司教が再会した場面ではふたりのフランス語でのやりとりが、以下のように英語で描写されている。

> ［Juliet］sobbed rather than articulated, in French, “My guardian! my preserver! my more than father!—I have not then lost you!”
>
> Deeply affected, the man of years bent over, and blessed her; mildly, yet fondly, uttering, in the same language, “My child! my Juliet!—Do I then behold you again, my excellent child!” Then, helping her to rise, he added, “Young willing martyrdom is spared, my dear, my adopted daughter! and I, most mercifully! am spared its bitter infliction. Thanksgiving are all we have to offer, thanksgiving and humble prayers for UNIVERSAL PEACE!”[69]

親子ないしそれ以上の親愛の情を表す言葉のやりとりの後、司教がジュリエットに説く教訓は、聖職者ならではの、感謝の祈りと世界の平和への謙虚な祈禱の必要性を説くものとなっている。しかし、英語で描写されていることから、読者は、語り手が専門性の高いフランス語（ここでは、カトリック司祭の職業的方言）をひけらかしているという印象を受けにくいと考えられる。エッジワースの『パトロニッジ』が出版当時、女性不可侵の公職の世界を表象したことから酷評されたことを思い起こせば、この場面の語りの戦略は無難といえるだろう。

以上のように家父長制のジェンダー編成に対抗ないし交渉する語り手のパフォーマティヴも視野に含めれば、「文芸共和国」という公共圏は、女性小説家がジェンダー役割やパトリオットのあり方、合同体制下の各ネーションや個人のアイデンティティを、多層的に再定義できる言説空間として、両作家にその可能性を各々追求されているといえるだろう。

おわりに

バーニーの『放浪者』とエッジワースの『パトロニッジ』は文化的に柔軟なパトリオット

像を例示することにより、ロマン主義ナショナリズム言説の欠陥を是正することを試みている。結果、両作品において、合同体制下の英国、イングランド、アイルランドのネーションのアイデンティティは文化的に柔軟なものとして編成され、両作家各々のナショナル・アイデンティティの問題の解決も図られている。つまり、両作品とも文化ナショナリズムに代える言説紡ぐ余地をパトリオティズムという概念の周囲に見出し、「文芸共和国」という「公共圏」で展開するのだ。また、ジェンダー規範に関しても、テクストのテーマ要素では妥協を見せる一方、語り手のパフォーマティヴで逸脱を交えることで、巧みな抵抗を試みている。

ハーバーマスのヴィジョンを修正し、個人のアイデンティティ形成が「公共圏」でもなされるべきであるとキャルホーンのように考えるのならば[70]、バーニーとエッジワースはまさにそういった可能性を「公共圏」に切り拓いているといえるだろう。さて、そのアイデンティティ再構築の実践が、『エヴェリーナ』の冒頭でバーニーが期待したように「文芸共和国」を豊穣にすることに成功しているといえるだろうか。問題意識を共有するエッジワースによって「ナショナルな物語／国民小説」（national tale）、あるいは「地域小説」（regional novel）と称されるサブジャンルが確立され、その創作活動にインスピレーションを受けたウォルター・スコットの「歴史小説」が、小説を「文芸ジャンル」に格上げされることに結実した[71]。そのような大きな流れでロマン派期の文学の系譜を捉えるのであれば考えるならば、バーニーが目指したような「豊穣」はもたらされているといえるのではなかろうか。

＊本論文は、2007–2010 年度科学研究費基盤研究 B「18 世紀英国における女性の言説と公共圏―文学研究と歴史研究の断層と結節点」（課題番号 19320047 研究代表者：冨山太佳夫）の成果の一部であり、2009 年日本英文学会関東支部 1 月例会シンポジウムの口頭発表「女性の越境と愛国心―連合王国の内と外」に大幅な加筆を施したものである。

註

1） Jeffrey S. Doty, *Shakespeare, Popularity and the Public Sphere*（Cambridge: Cambridge University Press, 2017）; *Shakespeare*, 14. 1（2018）: Special Issue on Shakespeare and the Public Sphere, Guest Edited by Nigel Wood; Laura Knoppers, “Gender and the Public Sphere in Habermas and Milton: New Critical Directions”, *Literature Compass*, 11. 9（2014）, 615–24; Sean D. Moore, *Slavery and Making of the Early American Libraries: British Literature, Political Thought, and the Transatlantic Book Trade, 1731–1814*（Oxford University Press, 2019）.

2） 例えば、Walter Lippmann, ed., *Public Spheres and Collective Identities*（London: Routledge, 2018）.

3） Philip Pond and Jeff Lewis, “Riots and Twitter: Connective Politics, Social Media and Framing Discourses in the Digital Public Sphere”, *Information, Communication and Society*, 22（2019）, 213–31; Andrew Tolson, “‘Out is Out, and That’s It the People Have Spoken’: Uses of Vox Pops in UK TV News Coverage of the Brexit Referendum”, *Critical Discourse Studies*, 16（2019）, 420–31.

4） Angela Keane, *Women Writers and the English Nation in the 1790s: Romantic Belongings*（Cambridge:

Cambridge University Press, 2000), pp. 4–6.

5) Keane, pp. 6–7.

6) Keane, p. 4. Joan Landes, "The Public and Private Spheres: A Feminist Reconsideration"（1995）と Nancy Fraser, "What's Critical About Critical Theory?: The Case of Habermas and Gender"（1989）が収録される Joanna Meehan, *Feminists Read Habermas: Gendering the Subject of Discourse*（London: Routledge, 1995）は、2013 年にも版を重ねている。Keane 以降の先行研究概観は、Ann Brooks, *Women, Politics and the Public Sphere*（Chicago: Polity, 2019）の第二部 "Introduction" 参照。

7) Harriet Guest, *Small Change: Women, Learning, Patriotism, 1750–1810*（Chicago: University of Chicago Press, 2000); Guest, "Bluestocking Feminism", in *Reconsidering the Bluestockings*, ed. by N. Pohl and B. A. Schellenberg（San Marino: Huntington Library, 2003), 59–81. Brooks, p. 15.

8) バーニー、エッジワースの伝記については以下参照。Margaret Anne Doody, *Frances Burney: The Life in the Works*（Cambridge: Cambridge University Press, 1988). Marilyn Butler, *Maria Edgeworth: A Literary Biography*（Oxford: Clarendon Press, 1972).

9) Craig Calhoun, "Nationalism and the Public Sphere", in *Public and Private in Thought and Practice: Perspectives on a Grand Dichotomy*, ed. by Jeff Weintraub and Krishan Kumar（Chicago: The University of Chicago Press, 1997), pp. 82–88.

10) Nancy Fraser, "Rethinking the Public Sphere: A Contribution to the Critique of Actually Existing Democracy", *Social Text*, 25/26（1990), 56–80（pp. 61–63).

11) 上野千鶴子が留意するように、'patriotism' を「愛国心」や「愛国主義」と訳すのは不正確である。上野『ナショナリズムとジェンダー』(東京：青土社、1998), p. 186. 必ずしも国家（state）への忠誠を伴わない郷土愛を意味することもあるからである。上野や姜尚中の著作の用法にならい、本論でも「パトリオティズム」とカタカナ表記する。

12) Pat Roger, "Frances Burney", in *DNB*〈https://doi.org/10.1093/ref:odnb/603〉[accessed 1 September 2019].

13) Frances Burney, *The Wanderer; Or, Female Difficulties*, ed. by Margaret Anne Doody and Robert L. Mack（Oxford: Oxford University Press, 1991), p. 4. この版に収録される Doody の "Introduction", pp. vii- xxxvii（pp. xi-xii）も参照。Barbara Zonitch は、『放浪者』がバーニーの作品の中でもっとも明白に政治的な小説の一つであり、ウルフストンクラフトの『女性の権利の擁護』のような「フェミニストの作品」に深く影響を受けている、としている。Barbara Zonitch, *Familiar Violence: Gender and Social Upheaval in the Novels of Frances Burney*（Newark: University of Delaware Press, 1997), pp. 113–14.

14) *Wanderer*, p. 6.

15) Doody, "Burney and Politics" in *The Cambridge Companion to Frances Burney*, ed. by Peter Sabor（Cambridge: Cambridge University Press, 2007), pp. 93–110（p. 94).

16) Roger. 改姓の背景にあるバーニーの父の上昇志向とバーニー一家の社会的アイデンティティの脆弱性については、Betty Rizzo, "Burney and Society" in *The Cambridge Companion to Frances Burney*, ed. by Sabor, pp. 131–46 参照。

17) Doody もバーニーのナショナル・アイデンティティが多元的であるとみなしている。Doody, "Burney and Politics", p. 94.

18) *OED* 第 4 版の 'patriotism' の定義は、'The character or passion of a patriot; love of or zealous devotion to one's country. Sometimes ironically' である。また、ジョンソンの『英語辞典』(*A*

Dictionary of the English Language）第 4 版の ‘patriot’ の第二項に ‘It is sometimes used for a factious disturber of a government’ とある。

19） Patrick O’Nally, *Parties, Patriots and Undertakers: Parliamentary Politics in Early Hanoverian Ireland*（Dublin: Four Courts Press, 1997）, p. 174. 同様の見解は、Dustin H. Griffin, *Patriotism and Poetry in Eighteenth-Century Britain*（Cambridge: Cambridge University Press, 2002）, pp. 1–6. より広いヨーロッパの歴史的文脈における語法に関しては、Joep Leerssen, *Remembrance and Imagination: Patterns in the Historical and Literary Representation of Ireland in the Nineteenth Century*（Cork: Cork University Press, 1996）, pp. 8–32.

20） Michael Scrivener は、ロマン主義ナショナリズムが影響力を強めた 1789 年以降も、「公共圏」を通し啓蒙主義コスモポリタン思想は影響を保ち続けたとして、通説を修正している。Scrivener, *The Cosmopolitan Ideal in the Age of Revolution and Reaction, 1776–1832*（London: Pickering & Chatto, 2007）, p. 1. Scrivener の先行研究を受け、Esther Wohlgemut はロマン派期へのコスモポリタン思想の存続を認めるものの、啓蒙主義の時代のものとは一線を画した「ロマン主義コスモポリタニズム」（Romantic Cosmopolitanism）という概念を提唱し、ケース研究にはエッジワースを含めている。Wohlgemut, *Romantic Cosmopolitanism*（London: Palgrave, 2009）, p. 3.

21） Clíona Ó Gallchoir は、恐怖政治以降の時代に啓蒙主義の価値観を肯定する英国とアイルランドの女性作家が、女性の規範を逸脱していると非難されるリスク負っていたことを、エッジワースのケースを通して指摘している。Clíona Ó Gallchoir, *Maria Edgeworth: Women, Enlightenment and Nation*（Dublin: University College Dublin Press, 2005）, pp. 18–49.

22） もっとも、二人の作品はロマン主義ナショナリズムの文化的な排他性を受容しないまでも、その文化的差異に鋭敏な本質は尊重している。以下で取り上げるように模範的登場人物の属性に多文化理解を含めているのが端的な例である。

23） John Brewer, “‘The Most Polite Age and the Most Vicious’: Attitudes towards Culture as a Commodity 1660–1800”, in *The Consumption of Culture 1600–1800: Image, Object, Text*, ed. by Brewer and Ann Bermingham（London: Routledge, 1995）, pp. 362–82（p. 355）.

24） Frances Burney, *Evelina; Or the History of a Young Lady’s Entrance into the World*, ed. by Edward A. Bloom（Oxford: Oxford University Press, 1968）, p. 3.

25） 「文芸共和国」における小説の地位の低さは、『放浪者』の献辞においても触れられている。*Wanderer*, pp. 8–10.

26） *Evelina*, p. 7.

27） *Evelina*, p. 7.

28） *Evelina*, p. 9.

29） 但し、初版は匿名だったので、この序の「編集者」のジェンダーも曖昧にされていた。この序におけるバーニーの匿名行為とジェンダーの政治学については、Vivien Jones, “Burney and Gender”, in *The Cambridge Companion to Frances Burney*, ed. by Peter Sabor（Cambridge: Cambridge University Press, 2007）, pp. 111–29 を参照。

30） Maria Edgeworth, *Letters for Literary Ladies to Which Is Added an Essay on the Noble Science of Self-Justification*（*1795*）, ed. by Claire Connolly（London: J. M. Dent, 1993）, p. 16.

31） *Literary Ladies*, p. 38.

32） Edward Gibbon, *Gibbon’s Decline and Fall of the Roman Empire*（London: J. M. Dent, 1966）, p. 40.

33） Doody も「ジュリエットがフランス人とイングランド人のどちらなのかは言い難い。実際、

ある意味では両方である。」としている（Frances Burney, p. 324）。

34） Stephanie Russo は、ジュリエットの衣装と化粧を用いてやすやすと「越境」できる造形に注目し、作品がナショナリティの境界を無効なものにしていると論じる。また、Kandice Sharren は、語りの形式に注目し、読者がジュリエットの心理を共有、共感するのが困難な形式となっている、と論じている。Stephanie Russo, "'Ovid Was a Mere Fool to You': Clothing and Nationality in Frances Burney's *The Wanderer*", *Sydney Studies in English*, 41（2015）, 31–46. Kandice Sharren, "The Texture of Sympathy: Narrating Sympathetic Failure in Frances Burney's *Camilla* and *The Wanderer*", *European Romantic Review*, 28（2017）: 701–27.

35） バーニーの父方の祖母と二人の叔母は Gregg's coffee house の切り盛りを行なっていた。しかし、上昇志向の高いチャールズ・バーニーは、これらの親族との血縁関係を公にしなかった。Rizzo, p. 136.

36） *Wanderer*, p. 837.

37） *Wanderer*, p. 839.

38） *Wanderer*, p. 839.

39） *Wanderer*, pp. 839–40.

40） コーヒーハウスに「公共圏」の概念を適用することを疑問視する観点もある。英国史学者の川北稔は、「ドイツ風のそのような大げさな概念が適切かどうかは疑問」と留保している。川北稔「開かれた社交・閉じられた社交—コーヒーハウスからクラブへ」、川北稔・綾部恒雄編『結社の英国史—クラブから帝国まで』（東京：山川出版社、2005）。

41） 当時の記録に基づき、コーヒーハウスには、女性の経営者・使用人（coffee-women）との会話や性的交渉を目当てに来店する男性客もいて、完全に「男性的」で「理性的」な空間ではなかったと見る批評家もいる。Markman Ellis, "Coffee-Women, 'The Spectator' and the Public Sphere in the Early Eighteenth Century", in *Women, Writing, and the Public Sphere in 1700–1830*, ed. by Elizabeth Eger and others（Cambridge: Cambridge University Press, 2001）, pp. 27–52.

42） Doody によれば、バーニーは後にゴシック小説で多用されることになるイメージや仕掛けを先取りして用いたものの、現在の悪をあたかも過去のもののように表象する「ゴシック・モード」は避けた。『放浪者』における「美しいゴシック風の建物」も、「古代の優雅さ、軽やかさ、趣味の良さをのこす最近で最良の遺物」として、肯定的なイメージで表象される。Doody, "Burney and Politics", p. 96.

43） したがって、Zonitch は、『放浪者』は『エヴェリーナ』と異なり、罪な父親に救済を与えず、貴族の支配のあらゆる形に幻滅している、と見ている（p. 136）。

44） *Wanderer*, p. 12.

45） Katharine M. Rogers, *Frances Burney: The World of 'Female Difficulties'*（New York: Harvester Wheatsheaf, 1990）, p. 134.

46） *Wanderer*, p. 16.

47） *Wanderer*, p. 841.

48） *Wanderer*, p. 859.

49） *Wanderer*, p. 13. この引用にあるように、ハーリーのフランス語の発話は英語で記述されているため、後述するジュリエットや語り手のフランス語の発言ほど異彩を放たないものとして表象されている。

50） *Wanderer*, p. 873.

51） 例えば、Claudia L. Johnson はハーリーをセンチメンタル小説の系譜の「感情の人」（Man of Feeling）とみなしている。Claudia L. Johnson, *Equivocal Beings: Politics, Gender and Sentimentality in the 1790s: Wollstonecraft, Radcliffe, Burney, Austen, Women in Culture and Society*（Chicago: University of Chicago Press, 1995）, p. 172. ジュリエットとロビンソン・クルーソーの比較については、Zonitch が、むしろ「家と、友達、収入、保護を確保する必要がある」ジュリエットと、「君主制を敷く」クルーソーの格差に注意を喚起する（p. 123）。バーニーの「ヒーロー」たちは、因習に追従するあまり、たいてい「とても腰抜けである」と、Doody は評している。Doody, “Burney and Politics”, p. 107.

52） Doody, “Burney and Politics”, p. 107.

53） Zonitch は、ジュリエットを迫害する登場人物の多数が「世間体を気にする父系制の原理」を振りかざしている点に注目し、バーニーが「私生児」と風評を立てられるヒロインを生み出しているのは、社会の偏見を批判するためである、と鋭く指摘している（p. 117）。また、アイルトン夫人がお気に入りの黒人奴隷を脅迫している場面では、ジュリエットが、「コロニアルな他者」に結びつけられている、と興味深い見解を示している（p. 121）。

54） *Wanderer*, p. 643.

55） *Wanderer*, p. 727. この登場人物を Julia Epstein はゴシック小説に出てくるような恐怖を体現していると評している。Julia Epstein, *The Iron Pen: Frances Burney and the Politics of Women's Writing*（Madison: University of Wisconsin Press, 1989）, p. 176. 彼が主張するジュリエットの「結婚」は神前式でなく、彼女の宣誓を欠いたまま式が中断されたことから、作品中無効とされている。

56） Yuri Yoshino, “‘Spain Vanished, and Green Ireland Reappeared’: Maria Edgeworth’s Patriotism in *The Absentee* and *Patronage*”, in *New Voices in Irish Criticism 5*, ed. by Ruth Connolly and Ann Coughlan（Dublin: Four Courts Press, 2005）, pp. 166–76.

57） R. L.（and Maria）*Edgeworth, Essays on Professional Education*（London: J. Johnson, 1809）.

58） Pickering 版の Conor Carville と Marilyn Butler の注参照。Maria Edgeworth, *The Works of Maria Edgeworth*, 12 vols.（London: Pickering & Chatto, 1999–2003）, VI: *Patronage* I & II（1999）, pp. 246, 256. また、Jacqueline Pearson, “Arts of Appropriation”, in *The Yearbook of English Studies*, 28（1998）: 223–25.

59） *Wanderer*, p. 116.

60） Susan Sniader Lanser, *The Narrative Act: Point of View in Prose Fiction*（Princeton: Princeton University Press, 1981）, p. 126.

61） *Works of Maria Edgeworth: Patronage* III & IV（1999）, VII, p. 80.

62） *Works of Maria Edgeworth*, VII, p. 110.

63） ‘The proper lady’ の定義については、Mary Poovey, *The Proper Lady and the Woman Writer: Ideology as Style in the Works of Mary Wollstonecraft, Mary Shelley, and Jane Austen*（Chicago: University of Chicago Press, 1984）の特に Chapter 1 参照。

64） *Works of Maria Edgeworth*, VII, pp. 232–33.

65） 但し、*Patronage* の出版当時のレビューは、エッジワースが男性の公職の世界を書くことに信ぴょう性がなかったり、女性らしからぬ語彙を用いていると酷評した。Butler, “Introductory Note”, *Works of Maria Edgeworth*, VI, pp. xxi-xxii.

66） *Wanderer*, p. 385.

67） *Wanderer*, pp. 385–86.

68） バーニーの「全知の語り手の独自のバージョン」については、Jane Spencer, “*Evelina* and

Cecilia", in *The Cambridge Companion to Frances Burney*, ed. by Peter Sabor（Cambridge: Cambridge University Press, 2007）, pp. 23–37 参照。

69） *Wanderer*, p. 857.

70） Calhoun, p. 35.

71） Ina Ferris によれば、ウォルター・スコットの歴史小説シリーズが高い評価を得た結果、「準文芸ジャンル」として軽視されていた小説が「文芸ジャンル」の高いステータスを獲得するようになった。Ferris, *The Achievement of the Literary Authority: Gender, History, and the Waverley Novels*（Ithaca: Cornell University Press, 1991）．エッジワースがスコットに与えた影響に関しては、吉野「小説、ネイション、歴史—マライア・エッジワースとウォルター・スコット」 鈴木美津子他『女性作家の小説サブジャンルへの貢献と挑戦—デイヴィス、ヘイウッド、エッジワース、オーエンソンの場合』（東京：英宝社、2008）, pp. 67–104.

Works Cited

Brewer, John, "'The Most Polite Age and the Most Vicious': Attitudes towards Culture as a Commodity 1660–1800", *The Consumption of Culture 1600–1800: Image, Object, Text*, ed. by Brewer and Ann Bermingham（London: Routledge, 1995）, pp. 362–82

Brooks, Ann, *Women, Politics and the Public Sphere*（Chicago: Polity, 2019）

Burney, Frances, *Evelina: Or the History of a Young Lady's Entrance into the World*（Oxford: Oxford University Press, 1968）

— *The Wanderer; Or, Female Difficulties*, ed. by Margaret Anne Doody and Robert L. Mack（Oxford: Oxford University Press, 1991）

Butler, Marilyn, "Introductory Note", in *The Works of Maria Edgeworth*, *Patronage*, ed. by Marilyn Butler and others（London: Pickering & Chatto, 1999–2003）, VI: *Patronage*, I&II（1999）

— *Maria Edgeworth: A Literary Biography*（Oxford: Clarendon Press, 1972）

Calhoun, Craig, "Nationalism and the Public Sphere", in *Public and Private in Thought and Practice: Perspectives on a Grand Dichotomy*, ed. by Jeff Weintraub and Krishan Kumar（Chicago: The University of Chicago Press, 1997）, pp. 75–102

Doody, Margaret Anne, "Burney and Politics" in *The Cambridge Companion to Frances Burney*, ed. by Peter Sabor（Cambridge: Cambridge University Press, 2007）, pp. 93–110

— *Frances Burney: The Life in the Works*（Cambridge: Cambridge University Press, 1988）

— "Introduction", in Frances Burney, *The Wanderer; Or, Female Difficulties*, ed. by Doody and Robert L. Mack

Doty, Jeffrey S., *Shakespeare, Popularity and the Public Sphere*（Cambridge: Cambridge University Press, 2017）

Edgeworth, Maria, *Letters for Literary Ladies to Which Is Added an Essay on the Noble Science of Self-Justification*（*1795*）, ed. by Claire Connolly（London: J. M. Dent, 1993）

— *The Works of Maria Edgeworth*, ed. by Marilyn Butler and others, 12 vols（London: Pickering & Chatto, 1999–2003）, VI&VII: *Patronage*（1999）

Edgeworth, R. L.［and Maria］, *Essays on Professional Education*（London: J. Johnson, 1809）

Ellis, Markman, "Coffee-Women, 'The Spectator' and the Public Sphere in the Early Eighteenth Century", in *Women, Writing, and the Public Sphere in 1700–1830*, ed. by Elizabeth Eger and others（Cambridge: Cambridge University Press, 2001）, pp. 27–52.

Epstein, Julia, *The Iron Pen: Frances Burney and the Politics of Women's Writing*（Madison: University of

Wisconsin Press, 1989）

Ferris, Ina, *The Achievement of the Literary Authority: Gender, History, and the Waverley Novels*（Ithaca: Cornell University Press, 1991）

Fraser, Nancy, "Rethinking the Public Sphere: A Contribution to the Critique of Actually Existing Democracy", *Social Text*, 25/26（1990）, 56–80

— "What's Critical about Critical Theory?: The Case of Habermas and Gender" in *Feminists Read Habermas: Gendering the Subject of Discourse*, ed. by Joanna Meehan（London: Routledge, 1995）, pp. 21–56

Gibbon, Edward, *Gibbon's Decline and Fall of the Roman Empire*, 6 vols（London: J. M. Dent, 1966）

Griffin, Dustin H, *Patriotism and Poetry in Eighteenth-Century Britain*, Cambridge: Cambridge University Press, 2002

Guest, Harriet, "Bluestocking Feminism", in *Reconsidering the Bluestockings*, ed. by N. Pohl and B. A. Schellenberg（San Marino: Huntington Library, 2003）, 59–81

— *Small Change: Women, Patriotism, Learning, 1750–1810*（Chicago: University of Chicago, 2000）

Habermas, Jürgen, *The Structural Transformation of the Public Sphere: An Inquiry into a Category of Bourgeois Society*（Cambridge, Mass: MIT Press, 1989）

Johnson, Claudia L., *Equivocal Beings: Politics, Gender and Sentimentality in the 1790s: Wollstonecraft, Radcliffe, Burney, Austen, Women in Culture and Society*（Chicago: University of Chicago Press, 1995）

Jones, Vivien, "Burney and Gender", in *The Cambridge Companion to Frances Burney*, ed. by Peter Sabor（Cambridge: Cambridge University Press, 2007）, pp. 111–29

Keane, Angela, *Women Writers and the English Nation in the 1790s: Romantic Belongings*（Cambridge: Cambridge University Press, 2000）

Knoppers, Laura, "Gender and the Public Sphere in Habermas and Milton: New Critical Directions", *Literature Compass*, 11. 9（2014）, 615–24

Landes, Joan, "The Public and Private Spheres: A Feminist Reconsideration" in *Feminists Read Habermas: Gendering the Subject of Discourse*, ed. by Joanna Meehan（London: Routledge, 1995）, pp. 91–116

Lanser, Susan Sniader, *The Narrative Act: Point of View in Prose Fiction*（Princeton: Princeton University Press, 1981）

Leerssen, Joep, *Remembrance and Imagination: Patterns in the Historical and Literary Representation of Ireland in the Nineteenth Century*（Cork: Cork University Press, 1996）

Lippmann, Walter, ed., *Public Spheres and Collective Identities*（London: Routledge, 2018）

Meehan, Joanna, *Feminists Read Habermas: Gendering the Subject of Discourse*（London: Routledge, 1995）

Moore, Sean D., *Slavery and Making of the Early American Libraries: British Literature, Political Thought, and the Transatlantic Book Trade, 1731–1814*（Oxford: Oxford University Press, 2019）

Narain, Mona, "Not the Angel in the House: Intersections of the Public and Private in Maria Edgeworth's *Moral Tales* and *Practical Education*", in *New Essays on Maria Edgeworth*, ed. by Julie Nash（Aldershot: Ashgate, 2006）, pp. 57–71.

Ó Gallchoir, Clíona, *Maria Edgeworth: Women, Enlightenment and Nation*（Dublin: University College Dublin Press, 2005）

O'Nally, Patrick, *Parties, Patriots and Undertakers: Parliamentary Politics in Early Hanoverian Ireland*（Dublin: Four Courts Press, 1997）

Pearson, Jacqueline, "Arts of Appropriation", in *The Yearbook of English Studies*, 28（1998）, 223–25

Pond, Philip and Jeff Lewis, "Riots and Twitter: Connective Politics, Social Media and Framing Discourses in the Digital Public Sphere", *Information, Communication and Society*, 22（2019）

Poovey, Mary, *The Proper Lady and the Woman Writer: Ideology as Style in the Works of Mary Wollstonecraft, Mary Shelley, and Jane Austen*（Chicago: University of Chicago Press, 1984）

Rizzo, Betty, "Burney and Society", in *The Cambridge Companion to Frances Burney*, ed. by Peter Sabor（Cambridge: Cambridge University Press, 2007）, pp. 131–46

Roger, Pat, "Frances Burney", in *DNB*〈https://doi.org/10.1093/ref:odnb/603〉［accessed 1 September 2019］

Rogers, Katharine M., *Frances Burney: The World of 'Female Difficulties'*（New York: Harvester Wheatsheaf, 1990）

Russo, Stephanie, "'Ovid Was a Mere Fool to You': Clothing and Nationality in Frances Burney's *The Wanderer", Sydney Studies in English*, 41（2015）, 31–46

Sabor, Peter, ed., *The Cambridge Companion to Frances Burney*（Cambridge: Cambridge University Press, 2007）

Salih, Sarah, *'Camilla* and *The Wanderer'*, in *The Cambridge Companion to Frances Burney*, ed. by Peter Sabor（Cambridge: Cambridge University Press, 2007）, pp. 39–53.

Scrivener, Michael, *The Cosmopolitan Ideal in the Age of Revolution and Reaction, 1776–1832*（London: Pickering and Chatto, 2007）

Shakespeare, 14. 1（2018）: Special Issue on Shakespeare and the Public Sphere, ed. by Nigel Wood

Sharren, Kandice, "The Texture of Sympathy: Narrating Sympathetic Failure in Frances Burney's *Camilla* and *The Wanderer", European Romantic Review*, 28（2017）, 701–27

Spencer, Jane, *"Evelina* and *Cecilia"*, in *The Cambridge Companion to Frances Burney*, ed. by Peter Sabor（Cambridge: Cambridge University Press, 2007）, pp. 23–37

Tolson, Andrew, "'Out is Out, and That's It the People Have Spoken': Uses of Vox Pops in UK TV News Coverage of the Brexit Referendum", *Critical Discourse Studies*, 16（2019）, 420–31

Wohlgemut, Esther, *Romantic Cosmpolitanism*（London: Palgrave, 2009）

Yoshino, Yuri "'Spain Vanished, and Green Ireland Reappeared': Maria Edgeworth's Patriotism in *The Absentee* and *Patronage"*, *New Voices in Irish Criticism 5*, ed. by Ruth Connolly and Ann Coughlan（Dublin: Four Courts Press, 2005）, pp. 166–76

Zonitch, Barbara, *Familiar Violence: Gender and Social Upheaval in the Novels of Frances Burney*（Newark: University of Delaware Press, 1997）

上野千鶴子 『ナショナリズムとジェンダー』 東京：青土社、1998

川北稔 「開かれた社交・閉じられた社交–コーヒーハウスからクラブへ」 川北稔・綾部恒雄編『結社のイギリス史–クラブから帝国まで』 東京：山川出版社、2005, pp. 86–105

吉野由利 「小説、ネイション、歴史—マライア・エッジワースとウォルター・スコット」 鈴木美津子・玉田佳子・五幣久恵・吉野由利『女性作家の小説サブジャンルへの貢献と挑戦』東京：英宝社、2008, 67–104

ENGLISH SUMMARY

Women's Border Crossings and 'the Republic of Letters': The Construction of National Identities and the Possibilities of the Public Sphere

YOSHINO Yuri

This article examines what kind of possibilities Romantic-period women writers found in the literary public sphere ('the Republic of Letters'), by comparing Frances Burney's *The Wanderer* (1814) and Maria Edgeworth's *Patronage* (1814). Many scholars have criticized the lack of gender perspectives in Jürgen Habermas's idealization of 'the public sphere' in *The Structural Transformation of the Public Sphere: An Inquiry into a Category of Bourgeois Society*. Angela Keane among others, however, has noted the beneficial aspect of the English public sphere in the 1790s. According to Keane, the 'rational' language of the public sphere enabled 'at some time wandering women' such as Mary Wollstonecraft to counteract the 'affective' discourse of Romantic nationalism, which restricts women's role to reproduction. This article attempts to develop the findings and the scope of earlier works on women's writing and the English public sphere during the Romantic period by critics such as Keane and Harriet Guest, by analyzing the works by Burney and Edgeworth, who shared the problem of 'ambiguous' national identity. This study will explore what kind of patriot *The Wanderer* and *Patronage* represent as ideal, and how these novels attempt to reconstruct the authors' national identities in the public sphere.

Key Words: Frances Burney, Maria Edgeworth, the public sphere, national identity, patriotism